■　秋の公開講演会

環境の世紀を生きるために

―レイチェル・カーソンが遺したメッセージ―

2008年10月25日（土）
14:00～16:00
南山大学　名古屋キャンパス D棟 DB1教室

上　遠　恵　子氏
（レイチェル•カーソン日本協会理事長）

【司会（津村）】：こんにちは。お時間が来ましたので公開講演会を始めさせていただきたいと思います。

南山大学人間関係研究センターのセンター長をしております津村と申します。よろしくお願いいたします。

人間関係研究センターでは、春と夏にこういったかたちで公開講演会をさせていただいております。今日は遠方より、レイチェル・カーソン日本協会理事長でエッセイストの上遠恵子さんにお越しいただきまして講演をお願いいたしました。

今、とても大切な課題が私たちの前に突き付けられていると思います。今日の講演会が、明日の、または今日の、私たちの生きる道の一つを選択する、そんな日になればいいなと思っております。

ここの講演会は地域の方々、それから学校心理士会、学校教育現場で子どもたちの教育に当たっていただいている先生方にも呼び掛けております。私たち地域の一人一人、それから、学校教育現場で子どもたち一人一人が、新しい命を大切にしながら育て合う環境ができることを願って、今日のこの公開講演会を開かせていただきたいと思います。

それでは、さっそく上遠先生のご紹介も兼ねまして、私どもの研究センターのセンター員であります、グラバア先生よりご紹介をしていただこうと思います。よろしくお願いします。

【司会（グラバア）】：皆さん、こんにちは。本日は、レイチェル・カーソンのメッセージを上遠さんを通して、皆さんといっしょにお聞きするということを私も大変楽しみにしております。

講師の上遠さんは、東京薬科大学をご卒業なさいました。たぶんその頃ではないかなと思うのですが、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』の原書に、昆

虫学者でいらしたお父様を通して、出会われたということでした。そしてご卒業後、東京大学農学部の農芸化学科研究室に勤務をなさっていらしたときの恩師から、レイチェル・カーソンの人となり、生き様を示した本を紹介されて以来、レイチェル・カーソンの研究をライフワークとされているということです。

『沈黙の春』。これは世界を変えた本の一つ、というふうに言われております。ちょうど『沈黙の春』が出版されて25周年に当たります1987年に、日本で初めてレイチェル・カーソン日本協会を設立しようという気運が盛り上がりました。そのときも設立にご尽力くださいまして、最初の代表委員のお一人をお勤めになりました。

以来、ずっとご研究を続けられ、先程ご紹介にありましたレイチェル・カーソン日本協会理事長というお仕事を、今もお続けになっているわけです。

それで実際に、レイチェル・カーソンは5冊の本を著しておりますけれども、そのうちの3冊を翻訳なさっていらっしゃいます。それから長編記録映画として『センス・オブ・ワンダー』という作品も作られたのですが、その製作にも参加なさって、朗読者として出演なさいました。

『センス・オブ・ワンダー』ですが、この本は彼女が亡くなってから出版されたものですが、詩的な本当に美しい文章で日本語で翻訳をされていて、レイチェル・カーソンのフィロソフィーと言いましょうか、彼女の心持ちというものが伝わってくる本ではないかなと思います。小さなお子さんを持ったお母さん方、それから自然の好きな方々にとてもいいのではということで、本日は入り口の所でご紹介をさせていただきます。ちょうどクリスマスも近いので、よろしかったらお求めください。

また、本日は大変貴重な映像もビデオで見せていただく予定になっておりますけれども、実は当センターの手違いでフィルムの最初の部分のところを操作ミスをしてしまい、少しお見苦しいかたちで皆さんにお見せすることになりまして、まことに申し訳ありません。お詫び申し上げます。

いろいろな著作から見ますと、本当に物静かでとても優しいお人柄に見えるレイチェル・カーソンという方が、当時この本『沈黙の春』を出せば政府・公共機関、そして製薬会社等から大変な圧力がかかるということを分かっていて、この本をお出しになったわけですね。ですから、そうした物静かな、甥御さんを本当にかわいがったり、自然の小さな命をいとおしんでいる彼女の中に、どこからそうした力が湧き出てきたんだろうか。そういったルーツもたぶん今日お話の中で知ることができるのではと、大変楽しみにしております。上遠先生、どうぞよろしくお願いいたします。

【上遠】：皆さん、こんにちは。ご紹介いただいた上遠恵子です。

今日の題は、「レイチェル・カーソンの遺したメッセージ」というふうに書きましたが、レイチェル・カーソンを知っている方は、手を挙げてくださいますか。半分以上ですね。

15年ぐらい前にある短大で、ニュートンやダーウィンだの、いろいろな人の名前を挙げて知っている人を聞いたことがありますがレイチェル・カーソンは、20人の中の最下位でした。それぐらいレイチェル・カーソンは、あまりよく知られてはいないかもしれませんが、環境問題を語るとき必ずその名前は挙げられます。

レイチェルは科学読み物作家としてすでに有名でしたが社会に大きなインパクトを与えたのが、1962年に出したこの『沈黙の春』（Silent　Spring）という本です。これで私たちは初めて化学物質による環境汚染が、どんなに大変なものかということを初めて知らされました。

それまで環境汚染というと、放射能汚染が盛んにマスコミなどでも言われておりました。1950年代に大気圏内で水爆の実験が行われ、日本の漁船第五福竜丸が死の灰を浴び、久保山さんという方が亡くなられました。こんな話があります。東京の築地市場に入荷したマグロにガイガーカウンターを近づけると、ガリガリガリガリという。つまりマグロは放射能を帯びて築地に水揚げされたのです。ですから私たちは、汚染というとすぐ放射能のことを思い浮かべおりました。特に日本は広島・長崎の経験者ですから、放射能汚染には非常に関心がありましたが、化学物質による汚染についてはあまり知りませんでした。

したがって、その頃たくさん使われていたDDTやBHCのような殺虫剤が環境の中にいつまでも残るということについても危惧の念は抱きませんでした。殺虫剤DDT、BHCはすごく効くんです。効力が長くもつということはいつまでも分解しないでいるということです。しかし「沈黙の春」によってそれらの物質は自然界の仕組みである食物連鎖で生物濃縮されて、食物連鎖の頂点にいる、猛禽類、人間、大型魚などの体の中に（化学物質が）蓄積されていって、それがやがて生命を攻撃することになるということを知ることとなりました。そこで私たちは、「えっ、そんなことあるの？」という感じになったわけです。

私は1929年生まれで、終戦の時が16才でしたから、空襲の怖さや戦中戦後のものすごい空腹感、着る物も無い、ちょうど今のテレビに出てくる難民と同じような姿であったということや戦争の悲惨さをしっかりと経験しています。ですから、その時代アメリカから入ってきたDDTやBHCが食糧増産に大きな力を発揮したことも見聞きしていましたから、最初私は『沈黙の春』を読んだときに、「やっぱりアメリカは、戦争に勝ったから、そして豊かだから、人間の食糧難を経験していないから、自然界の生き物が痛めつけられることについて問題視できるんだわ」と、非常に近視眼的な気持ちを持ちました。しかし、それが間違っていたということにすぐ気がつきました。

そのきっかけは1960年後半に、人間の母乳の中にもBHCやDDTが含まれていて、それをそのまま赤ちゃんが飲んでしまっていることが、厚生省の担当であった女性の朝日新聞記者（先年お亡くなりになった松井耶依さん）によってスクープされた記事を読んだことでした。また、そのころ私は農学部にいたの

で、いろいろな研究会などで農薬が諸刃の剣であって、効くけれども害も与えるものだという事実を見聞きするようになるにしたがって、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』をもう一度しっかり読み直してみようと思うようになりました。

レイチェル・カーソンは1907年生まれで、1964年に56才でガンで亡くなっているんですね。私が、レイチェル・カーソンに関心を持ったときにはすでに亡くなっていましたから、現実のレイチェル・カーソンにはお会いしていません。しかし、私はレイチェル・カーソンに関心を持ち始め、この方にどんどんはまり込んでいってしまいました。一度も面識が無く、ただ本を通してだけのかかわりでも、私の人生にこんなに大きな影響を与えたということ、私の人生のほとんど半分の40年近く、レイチェル・カーソンを研究してきたことを本当に不思議な出会いだと思っています。

それではまずレイチェル・カーソンがどんな顔をしていたか、どんな声をしていたかを見ていただきましょう。これは本当に貴重なフィルムです。テレビ朝日が20世紀の終わりに、「100人の20世紀」という特集を組んだ中の１つです。記者会見をしているところや、国会で証言しているところなど、レイチェル・カーソンの動いている姿が少し見られます。レイチェル・カーソンとその頃の大統領ジョン・F・ケネディが、どのように『沈黙の春』に対応したかが映っている映像です。まずそれを見ていただき、それからまた、お話します。

（ビデオ上映）

【上遠】：今、皆様にご覧いただいたような生涯を彼女は送りました。

この映像を見ていて思い出しましたが、私も戦後、駅頭でDDTの粉を掛けられた記憶があります。今は自前で白い髪ですけれど、その頃は真っ黒な髪でしたから粉を掛けられるとまっ白になっちゃうんですよ。それが嫌で一生懸命逃げ回ったんです。掛けるほうは、おばあさんに掛けるよりも若い女性に掛けるほうが面白いらしくて、追いかけてくるんですよね。東京の渋谷駅で逃げ回った記憶があります。

考えてみれば恐ろしいことですね。私はその頃にたくさんの、DDT、BHCを体に取り込んでいるので、私のたっぷり付いている脂肪組織の中にも、まだたくさん残っているかもしれません。

余談になってしまいますが、『沈黙の春』に出ておりますけれども、あるニュージーランドの農夫が、あまりにも太っていたので少し痩せようと思い減食をしてダイエットをした。すると体の具合が悪くなってしまった。それは農業をやっている間にいっぱい取り込んで脂肪組織に蓄えられていた農薬の化学物質が、ダイエットすることによって一時に血液の中に溶け出し、その結果肝臓を悪くしてしまった、ということが書いてあります。そして非常に長いこと具合が悪

かったと。この実例は化学物質が体の中に蓄積されるということの警告であります。私は自分に都合良く解釈してダイエットはしないということにしています。しかし、冗談ではなく、私たちの体の中には500種類以上の化学物質が含まれていると言われています。ですから、この問題は本当に大きな問題だと思います。

食べ物の中だって、今はもう、化学物質フリーな食べ物など全くありませんものね。ですから子どもたちに、今、アトピーが増えていることや、生まれてきたときに小さな奇形があることなど、現実の問題として私たちの身近に迫って来ているわけです。彼女が警告したことは本当に大事なことだったと思っています。

「沈黙の春」が語りかけるもの

『沈黙の春』は、文庫本でも新潮社から出ておりますから、ぜひ一度お読みになっていただきたいと思います。そんなに読みやすい本ではないですが。『センス・オブ・ワンダー』は、すごく読みやすくて短いし、30分もあればすぐに読めてしまうのですけれどね。

「沈黙の春」はかなり硬質で、堅い本ですし、中に化学式が出てくるものですから、みんな「難しいからとても読み切れないわ」と思って、その辺でやめてしまうんです。そこで私たちは今、この本をゆっくりと全部最後まで、もちろん日本語で、読みましょうと言う会を、毎月やっています。もう2年近くなります。そうしますといろんなことが分かってきます。現代の問題としてどんなことが起きているだろうか、ということを話し合いながら読んでいくと、やっぱりこの本は素晴らしい本で、一度は読むべき本だということを思います。

この本は1962年に出て、もう45年ぐらい経っていますが、いまだに読まれているということは、彼女が警鐘をならした環境汚染がいまだに解決されずさらに深刻化していることの証であるとともに、この本がただ単に化学物質は「怖いものだ」という事実を羅列しているだけではなくて、地球上に棲むあらゆる生き物の生命に対しどのような影響があるかということを、経済の言葉ではなく生命の言葉で書いているから、読み続けられているのだと思います。

そして、このような現実ができてしまったことは、とりもなおさず人間の持っている科学技術が、いかに両刃の剣であるかということ。私たちは科学技術が発展することによって非常に便利で豊かな生活を手にすることができました。暑さも寒さも飢えも知らないで暮らせるようになってきました。ですが、その陰には必ず環境破壊や環境汚染というマイナスの面があるということを、便利さに目を奪われているあまりに忘れていたのではないかと思うのです。また、私たち先進国と言われる世界の20%程の国の人たちは、豊かさと便利さを手にすることができたわけですが、発展途上国にいる人たちは、そうした便利さ・豊かさから取り残されて貧困の中に今もいるということは、決して忘れてはい

けないと思っております。

彼女が『沈黙の春』を書き始めたきっかけは、先程のビデオにもありましたように、友達からの一通の手紙でした。しかし、もっと前から彼女は、1950年代の冷戦時代、核兵器や、原子力科学の開発によって人間が強大な力を持ってしまったことに対する強い危惧の気持ちを、根底に抱いていました。その頃、彼女はこんなことを言っています。

彼女の言葉を借りれば、「自然界の多くは永久に人間の手に届かないところにあると信じることは楽しいことでした。人間は森を切り開き、流れを堰き止めることは出来ても、雲、雨、風は神のものでした・・・。生命の流れは、すべてが神の指し示したいずれかの進路をーーその流れのひとしずくである人間に妨げられることなくーー永遠に流れ続けると思っていました。しかし、その一滴の人間が、原子力、核という大きな力を持ち、生命の流れの方向を変える力まで持ってしまった。そのことについて自分は、とても疑問を抱いた」と。このままでいいのだろうかと思いが、すでに科学読み物作家として名を成していましたけれども、一時はもう筆を折ろうかと思った程、深刻に考えていました。

そして、空から農薬、殺虫剤を散布する様子が、放射能を含んだ死の灰が降り注ぐのと同じように思えたのです。この２つはともに、かけがえのない生命に攻撃を仕掛けているのですから。

彼女はどうしてもこの本を書かなければならないと決心するのです。初めは有名な作家のＥ．Ｂ．ホワイトや、その他のジャーナリストに書いてもらおうと頼みますけれども、この難しい問題に取り組むことは科学的知識も必要だし、先程のビデオにあったように、企業からの反対運動もあろうし、激しい論争も起こるだろうことも容易に想像できました。Ｅ．Ｂ．ホワイトはこの問題に大きな関心をもっていましたが、執筆をひきうけてはくれません。そして「あなたが書きなさい。レイチェル、あなたこそ書ける人だ」と励ましたわけです。遂にレイチェルは『沈黙の春』を書くことになりました。『沈黙の春』の中にＥ．Ｂ．ホワイトの言葉も引用されています。

「私は人類に対して大した希望を寄せていない。人間は賢過ぎるあまりかえって自ら災いを招く。自然を相手にするときには、自然をねじ伏せて自分の言いなりにしようとする。私たち、みんなの住んでいるこの惑星にもう少し愛情を持ち、暴君の心を捨て去れば人類も生きながらえる希望があるのに」。

1958年頃から執筆を始めて4年後の1962年に本は出版されました。賛否両論の激しい論争が起こりました。個人的な誹謗もありました。これまでも空中撒布によって池の魚が死んでしまった、鳥が死んだ、牧場の馬は水飲み場の水を飲んで具合が悪くなった、幼稚園で遊ぶ子どもたち頭の上に農薬がふりかけられてしまったなど、いろいろな苦情が市民から寄せられていましたから一般市民はこの本をおおいに支持しました。しかし、農薬業界からは凄まじい反論が

あったわけです。

先程のビデオに出た農薬工業界の人に、私も1998年に会いましたけれども、「その頃は自分たちが正しいと思っていた」なんて言っていましたけど、今だってそう思っているんですよ。対応がソフトになっているだけで、やはり少しも本心は変わっていないなと思いました。

彼女は反論に対して特に一つ一つに反論はしないんです。それはなぜかというと、この本を書く前にすでに数百編の学術論文を読みこなしそれに基づいて書いていますので科学的に正確な証拠があるという確信があったからなのです。

科学者の道を選んだレイチェル

子どもの時から作文が得意だったレイチェルは作家志望でした。ペンシルベニア女子大学では、最初は文学専攻でした。二年生になって生物学の授業を受けたときに、自分が幼いときから慣れ親しんでいた自然界の不思議を解くカギが生物学の中に秘められていると気づき、専攻を理科に変えるのです。文学部の先生には「科学を勉強しても、女性はなかなか仕事に就けないのよ。中学の先生がそこそこよ」というような調子で、一生懸命文学部に残るように説得されるのですけれど、結局、生物学を専攻するにわけです。そしてボルチモアにあるジョンズ・ホプキンス大学大学院で「ナマズの発生段階における形態学的研究」で修士号を得ています。そうした積み重ねが科学と文学が合流した彼女の作品の特徴を生み出したのだと思います。科学論文を読みこなす基礎知識があったのですから、数百編の科学論文を読み、証拠がはっきりしているものを下に『沈黙の春』を書いたから、自信があるわけですね。仮定・推量や、想像で書いていない。そうした正確さは、市民運動でも、個人の日常生活でもとても大事なことだと思います。

また、どんな誹謗に対してもたじろぐことのない信念を支えていたものは、彼女自身の心の中に豊かに育まれていた自然に対する愛、生命に対する深い畏敬の念、つまり「センス　オブ　ワンダー」　自然界の不思議さ、美しさ、神秘さに目をみはる感性でありました。理論だけでねじ伏せていくということはできても、読者の心に響かなければ説得力はありません。やはり彼女の作品は、海の三部作もそうですが、非常に詩情豊かです。それは彼女自身の感性が、自然界の様々な現象の美しさ、不思議さを全部感じ取る感性があったからこそ成し得たものだと思います。『沈黙の春』も彼女の感性があったからこそその使命感を支え、大きな反響をもたらしたのだと思っています。

『センス　オブ　ワンダー』の起源

ここに『センス・オブ・ワンダー』という、小さな本があります。もうお読みになった方もおられると思います。先程のビデオのなかにひげ面のおじさんが出てきましたが彼はロジャーという彼女の養子で彼女の姪の息子なのです。

ロジャーはまだ小さい赤ん坊の頃から、レイチェルの持っていたサマーハウスで夏の間過ごしております。その別荘は米国の大西洋岸、カナダに接したメイン州の森の中にあり、小さな木造平屋建で今でも残っております。ビデオの最後のシーンのところで海が出ていましたね。そして、ひげ面のロジャーが最後に、「子どもを育てるにはセンス・オブ・ワンダーが大切だ」と言っていた、あの海岸は、レイチェルの別荘の庭先をトコトコと降りていった所にある岩だらけの海岸です。レイチェルはそういう所で夜となく、昼となく、小さなロジャーと自然界を探検して歩いています。その経験を基に、『センス・オブ・ワンダー』を書いたのでした。

この本は、1956年にアメリカの婦人雑誌『ウーマンズ・ホーム・コンパニオン』に、「子どもたちに驚きの目を見張らせよう」というタイトルで短いエッセイを書いたことが基になっています。そのなかに子どもたちに自然体験をさせよう、そこで育まれ豊かな感性がこれからの人生で大切だ、ということを書いています。お読みになった方はご存じだと思いますが、本当に、「そうだ、そうだ」と共感を抱くような文章が書かれています。私がこの本の中で、ここがキーワードだと思うところがあるので、少し読みたいと思います。

「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になる前に澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます」

「もしも私が、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに生涯消えることのない“センス　オブ　ワンダー”を授けてほしいと頼むでしょう」しかし「妖精の力にたよらないで、生まれつきそなわっている子どものセンス・オブ・ワンダーをいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります。」

本当にそうですね。そばにいてくれる大人とは、まず両親です。おじいちゃん、おばあちゃん、幼稚園、保育園、学校の先生。みんな子どもと感激をいっしょに、子どもが「奇麗だね」って言ったら、「本当奇麗だね」と言って子どもの感動を共有する大人がいることで、子どもにどんどん豊かな感性が育っていきます。

小さな子どもはお父さんやお母さんが大好きですから、幼稚園や保育園の帰りにみつけた小さな石ころや花、葉っぱを拾ってよくお土産に持ってきますよね。そしてお母さんに、「はい」って渡します。そういうときに「ああ、奇麗ね」「これ不思議だね。赤い色が入っているね」「これ、どこに咲いていたの、いっしょに連れていって」などと言って子どもの気持ちに寄り添うと、子どもは、すごくハッピーになります。

けれども、ちょっと忙しかったり疲れていたりすると、「何、そんな汚い石を持って来て」とか、「そんなところへ置かないで」とか言ってしまいます。それから、一番ひどいのは無視してしまうことですね。まったく無視する。そうすると、子どもはショボンとしてします。私たちは子どもの気持ちを、すんなりとそのまま受け取る大人になりたいとこの本を読んで心から思います。

また、環境教育の現場にいる人たちが盛んに引用するところがあります。「わたしは子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭を悩ませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。

子どもたちが出会う事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代はこの土壌を耕すときです。」

私はここを読んだとき、とくに後半の部分におおいに共感しました。子ども時代は、心の土を耕すときなのだと言うことに。今、子どもたちの中にもの知り博士がすごく多いんです。本当にもの知りなのね。私みたいなアナログ人間には分からないようなことを、いっぱい知っています。小さい子が、パソコン用語を駆使している場面に遭遇するともう本当に後期高齢者は辛いです。

それはとにかく、もの知り博士でもいいけど、案外本物を知らないことが多いのです。ドングリが帽子を被っていることは知っていても、そのドングリが落ちている森に行ったことがなかったり、森の中を流れている風の音を知らなかったり、風のいい匂いを知らなかったり、いろいろ本物を知らないということがあります。私は幼い子ども時代は、そういう本物の自然に触れさせることが、大事だと思うのです。

レイチェル・カーソンの幼年時代

話をレイチェルに戻すと、レイチェルはペンシルベニア州の内陸部にある、昔、U．S．スチール社があった鉄鋼都市ピッツバーグから、30キロほど離れたスプリングデールという田園地帯で育ちました。そこには今も生家が残っています。現在は郊外の普通の住宅地になっております。1907年生まれのレイチェルが育った頃はその辺りは一面草原で、森がひろがり、丘のふもとにはアレゲニー川というきれいな川が流れていた田園地帯でした。レイチェルには、お姉さんとお兄さんがいますが、年が離れていたので、小さいレイチェルはお母さんといっしょに森や野原を歩き回ることが多いのでした。

レイチェルのお母さんは牧師の娘で、その当時、1800年代生まれの女性としてはしっかりとした教育を受け、学校の先生の資格を持っていました。1930年代のアメリカでも、結婚すると教師を辞めなければいけなかったんだそうですね。ですから、お母さんは1894年に結婚を機に学校の先生を辞めたのです。知的好奇心も旺盛で社会参加もしたいのに家庭に押し込められちゃったのです。

そういうふつふつたる思いを持っているお母さんでした。

その頃（1900年代の初期）、アメリカには自然学習運動というのがありました。自然界に出て、いろいろな自然界の動物や植物などの生態を勉強しようという運動でした。それは多分に神学的な意味もあって、神が創造したものがいかに素晴らしいかということを知る、という一面もあったようです。小学校の子どもは、「自然学習の手引き」というようなパンフレットを家庭にもちかえって親に見せました。この運動は、レイチェルのお母さんにとって、知的好奇心を満足させるまたとない機会になりました。

そこでお母さんは小さなレイチェルを連れて、森や野原を歩きまわりました。そして自然界の仕組み、今でいうエコシステムが、互いにかかわり合いながら自分たちの生命を支え、子どもを育て繁殖し、そしていつかは死んでいくということ。そして小さな虫は鳥に食べられ、小さな鳥はまた大きい鳥に食べられ、水の中にいる小さなプランクトンは小魚に食べられ、小魚は中魚に食べられるといういろいろな循環があることを、レイチェルに体験的に教えていきました。

そうした体験があるから、自分の大好きな友達である自然界の生き物たちが、化学物質によって、農薬によって、いためつけられ絶滅に追いやられていくことに大きな疑問を抱いたのです。そして農薬を作った人間は、人間の都合のためだけで虫を害虫と益虫に分けて、これは害虫だから抹殺してしまうのだといって殺虫剤をまき散らします。しかし、害虫を殺すためにまいた薬でも、益虫という名前を付けたものまでもが死んでしまうことに対して、本当に心底怒りに似た危惧の念を抱きました。それが『沈黙の春』を書かせる原動力になっています。

今これを書かなければ、自分は二度と再び森で美しい鳥の声を聞くことはできないだろうという、強い思いがあったのですね。彼女の作品の中で、『沈黙の春』と『センス・オブ・ワンダー』とは、まさに車の両輪のように彼女の思想と思いを表していると思っています。

「センス　オブ　ワンダー」の翻訳に関わって

『センス・オブ・ワンダー』は、今は新潮社から出ていますけれども、最初は1991年、佑学社という子ども向けの出版社から出版されました。そのとき、編集者の人と本のタイトルをどうしようかと相談しました。『センス・オブ・ワンダー』は、難しい英語ではないのですが、日本語にするといい訳がないのです。一言でポンと言えるような、訳が考えられないのです。ある先生が、これは“感応力”というようなものだとおっしゃいました。感じるの感に、応用問題の応に力ね。しかし、この本がもし“感応力”という本だったらどうでしょうか。ちょっと“感応力”ではアッピールしないのではないかと話しをして、「片仮名で、『センス・オブ・ワンダー』でもいいんじゃないですか。」「じゃあ、そうしよう」ということで、『センス・オブ・ワンダー』というタイトルになっ

たのでした。

本当にこの本は、日本人のフィーリングにあったのでしょうね。年齢を問わず多くの方が読んでくださって、佑学社から新潮社に引き継がれて、版を重ねて読まれています。

ひとつ笑い話をいたしましょう。『センス・オブ・ワンダー』が初めて佑学社から出たとき、私も自分の本が本屋に並ぶというのが嬉しくて、紀伊国屋に行きまして、「『センス・オブ・ワンダー』という本はありますか」って聞きました。すると若い女性の店員さんが「えっ、『戦争って何だ』って本ですか」って聞き返したのです。声を出して読むと「センス・オブ・ワンダー」と「戦争って何だ」って似てますよね。私は「『戦争って何だ』って本じゃなくて『センス・オブ・ワンダー』という本なんですけれど」と内心ニヤニヤしながら言いました。「あっ、それならあそこに」指さしてくれました。平積みになった本を見て安心したことがありました。その店員さんはいみじくも、「戦争って何だ」って言いましたけれども、センス・オブ・ワンダーという感性は、目の前の自然界に対して、美しいなあ、綺麗ね、不思議ね、可愛いわねっていう、柔らかなものだけではないと思います。自然界のしくみに対しても、人間社会の矛盾や不条理さ、戦争と平和について、また人間と自然とのかかわりについてもあらゆるものに対して、アンテナを張り巡らして真実をみつめ理解していく力であると思います。

自然とのふれあい

最近の国際情勢をみると、私もそんなに詳しくありませんけれども、世界中、この日本の社会にも、何とも言えない閉塞感と不安感が満ち、人間の心が荒廃してますよね。子どもが親を殺し、親が子どもを殺し、自分が誰にも認めてもらえないからといって人を殺してしまうというような、あまりにも悲しい不幸なことがあり過ぎます。こんなときこそ自然に触れることが求められるのではないかと思います。自然を仲立ちにすることで人間同士のコミュニケーションも取れるようになるのです。

親子が毎日幼稚園や保育園に行くときに、「〇〇さんのお家の梅の木を毎日見よう」とか、「あそこの空き地の隅っこの三角形、ここだけはいつも見よう」と決めておきます。そこにタンポポが咲いたり、「〇〇さんのお家の梅の木は花が咲いたよ」「青い実がなったよ」、そのうち「熟れて来たよ」すると、小さな自然を仲介にして親子の間でいろいろな話題がふえて来ます。これは小さな身近なことですけれども、大きな自然の中に行ったときでも、そういうことが起こります。

19年前の話ですが、南山短期大学が清里で一週間の合宿ワークショップを行いました。グラバア先生のご依頼で私は「センス・オブ・ワンダー」というタイトルのワークショップを担当しました。私の生涯で最初にやったワークショッ

プです。ワークショップで、参加の学生さんは十数人でした。その他にもいくつかのワークショップがありましたが私たちは同じメンバーで『センス・オブ・ワンダー』について読んだり語ったり、森を歩きまわったりしました。私は最初のワークショップだったので、緊張しコチコチになっていました。講義と違ってワークショップのやり方が分からない。学生さんたちにも、「先生、固くなってるね」と言われるぐらいだったのです。

　でも2日目から外に出ました。森のなかを歩きながら晩秋の自然を体感しました。持ってきた虫メガネで、いろんな小さいものも観察してもらいました。木の肌の模様、葉脈、落ち葉の下に隠れている小さな虫、苔などを驚きの声をあげながら観察しました。ホコリタケという丸っこい、ポコンとしたキノコが土の上に転がっていて、ポンポンと指ではじくとてっぺんの小さい穴からフーッと胞子を飛ばす様子を生まれて初めて見た人もいてみな息を殺して見つめたのでした。秋も深まっていたのでモミジや、黄色い白樺の葉っぱがさらさらと散り、強い風で白樺の皮が剥けて飛んでいく様子を見たりしているうちに、今までコチコチで、なかなかしっくり話し合いができなかったのが、2時間ぐらい歩いて帰ってくる間に、みんなすっかり仲良くなって自然にいろいろな話をしました。「あそこでみんな気が付かなかったけど、白い羽毛のような種が飛んでたよ」とか、「林の土がふかふかしていた」とか、「森の匂いが良かった」などのいろいろな言葉が出るようになりました。それからはワークショップはうまくいきました。最後の発表会のときには白い紙に木の枝や葉を貼りつけた背景の森の物語を作り、私は年老いた森の精になって、冬になったので眠りにつくという役をやりました。森の小動物や小鳥になった人もいるし、とても楽しいワークショップができました。

　その中の一人の方とは、今でもお付き合いがあります。そういういい経験をしました。そのように、何も大自然に行かなくても、中自然でも小自然でも植木一つでも、その自然と触れあうよって世界がひろがるのを感じることはいいことだと思います。そして、一度そのものに愛情を持つようになれば、またそのことについてもっとよく知りたいと思うようになると、レイチェルもこう言っています。

　“美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知のものに触れたときの感激、思いやり，憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたび呼び覚まされると、次はその対象となるものについてもっと知りたいと思うようになります。そのようにして見つけ出した知識はしっかりと身に付きます。”

子どもの世界の無限の可能性

　小さな子どものこんな話があります。3歳ぐらいの男の子が庭で遊んでいたら、何かが頭にコツンと当たった。それはヤマフジというフジの種子でした。豆科の植物は、実が熟してくると鞘が捻じれて弾けて種子を飛ばします。この

教室の上の段ぐらいまで飛ぶものもあります。その子はたまたま郊外の植物が多いところに住んでいたのでその種子に出会えたのです。自分の頭に当たったものが種子だったことで、その男の子は種子に対しての好奇心がむくむくと起きたのでしょう。子どもは小さくて地面に近いから、いろんなものを拾ってきます。その子も大人が見過ごしてしまうような種子などを、いっぱい拾ってきて宝物にしていました。母親は仕事を持っていたので、なかなかいっしょに散歩も出来なかったので、『たねの旅立ち』という大人向けの写真集を買ってきて与えました。大喜びで本をめくっていたその子は、自分の知っている種子がその写真に出ているのに下に書いてある説明の字が読めない。でもなんとかして読みたい。お母さんは昼間いないから、教えてもらえない。そこで一計を案じて、お隣の小学2年生のお兄ちゃんに字を教えてもらおうと思って、本を抱えてチョコチョコとお隣りのお兄ちゃんのところへ行きました。そこに小さな幼い師弟関係ができまして、その男の子はついに平仮名を読むことができるようになりました。そして、自分が読みたいその種子の名前がガガイモという植物の種子であったことが分かりました。その子にとってみれば、知りたい一心で字を読めるようになったことが嬉しくて大得意でした。自分の思いを遂げたという満足感、達成感は自然界をはじめもろもろの事柄に関心を持つようになっていく原動力になります。

またある男の子は、小学校の3～4年生になって、ゲームに夢中になりました。毎日毎日ピコピコやっていましたがある程度習熟すると飽きてきます。そうするとまた外遊びにでかけで、仲間たちと基地作りとかをやりはじめました。そうすると、小さいときからあまり外遊びをしていない子どもは、もたもたしていてなかなかうまくいかない。その点小さいときに外遊びをしていた子どもは、ちょっとの痛さはなんのその、かなりワイルドにやってしまいます。でもそこが子どもの素晴らしいところで、いくらもたもたしている子どもでも、最終的には下手であれぐずぐずであれ、自分の基地をつくりあげるのです。

それを見ていると、やはり小さいときに自然体験をしている子どものほうがずっと手際はいいし、危機管理能力もあるのですね。いろいろな自然体験を子ども時代にさせておくのは、たくましさを育み、自然界にある生命に対する感性を培うことになるとい思います。

大抵の子どもは虫が大好きで飼ったりします。ダンゴ虫なんて大好きですよね。まずダンゴ虫に興味を示さない子どもはいないと思うのですが、あんなに不思議なものはないですね。触ればコロコロになって転がるし、放っておけば、またニュニュッと戻ってくるし、あんなに面白いものはない。あれこそ子どもが最初に出会う生命の神秘、不思議じゃないかと思います。そういうことをたくさん経験した子どもは、あるときは自分の不注意で飼っていた虫を死なせてしまうかもしれない。そうすると、悲しくなって泣いてしまいます。子どもは。かわいがっていたのに自分で殺してしまった。どんなにナゼナゼしても起き上

がらない虫がいるということから、死というものを知るわけです。そして、生命が大事だということを分かってくると思うのです。そして、自分がまわりにいるたくさんの生命、友だち、犬や猫、ダンゴ虫、バッタ、ナメクジなど。それらの生命に囲まれていることが分かったときに、お父さんでありお母さんでありお友達というのを大事に思うという気持ちが育つのだと、私は確信しています。

ですから親たちも一生懸命子どもに寄り添って、子どもといっしょに生命の輝きに感動を共にしてあげると、子どもも、いろいろな生命を愛するようになる。人間は自分の好きなものをいじめることは、まずしないと思います。母親は自分の子どもに害を加えるものには体ごとぶつかっていきます。そういう怒り、愛するものを守るときの怒りというのは、私は非常に大事な怒りだと思います。

ですから、穏やかに、丸くということは人間社会の中では大事なことだけれども、あるときには本気で怒ることも必要だと思っています。レイチェルが「沈黙の春」を書いたのも、自分が愛している自然界の生き物たちが、化学物質によって殺されていくことへの怒りでした。

平和でなければ環境は守れない

というのは、細かい身近な人間関係の中だけのことではないからです。私は先程も言いましたが、戦争体験者です。食べ物のない腹ぺこ、空爆の怖さも、機銃掃射の音も、目の前に焼夷弾が落ちてくる音も、今でもあのシュルシュルシュルという音は忘れられません。B29という爆撃機が飛んでくるゴオンゴオンという音も忘れられないですね。

そうした経験から、今は世界規模の大戦争はないけれども、あちらこちらで起きている戦争、もしかしたら戦争に巻き込まれて死ぬかもしれないという状況に対して、また、知らないうちに戦争が起きるかもしれないという現実に対しては、やっぱり私は声を大きくして怒らなければいけないと思います。平和は絶対に守らなければならないなと切実に思います。

私は戦争は、環境破壊の最大なものだと思っています。物理的に環境を壊すばかりだけではなくて、人間の心を荒廃させます。今、そうした紛争地域にいる子どもたちが、将来どんな大人になるのか、その心のケアはとても大切なことだと思っています。私が若ければそうした子どもの教育に参加したいと思うこともしばしばです。

自然のリズム

我々の日常生活はかなり発信モードです。「分かってちょうだい」「私はこう思うのよ」「こうしなさい、ああしなさい」という発信モードです。時々そのモードを変えて、受信モードにすることはとても必要ですね。

私は『センス・オブ・ワンダー』の映画を撮りに、アメリカのメイン州にロケーションで6回以上参りました。そのときにいかに受信モードになることが大事かということを感じました。待つということでしょうか。

森に映像を撮りに行って、いい光になるまで待ちましょうと言われれば、ただひたすら待つわけです。引き潮だから満潮まで待ちましょうと言われれば、とにかくその時間を待たなければならない。そこでは人間の力でどんなに逆立ちしても、その時間を早くすることはできない。そこには自然界のリズムがあるということ、人間以外の、人間の時計以外のリズムがあるということを知りました。

それはうまく表現できないけれども、私にとっていい経験でした。近代人はせっかちですぐ答えを出したがりますが、ある一定時間は待たなければならないことを知らなければならない。今、この時代だからこそそれが必要だと思います。たとえば、環境問題にどうやってコミットするか、どうやって参加していくか、いろんな答えがありますが、これじゃなければならないというものはないと思っています。ゴミの分別、リサイクルに協力する、水の浄化、子どもの自然体験、木を植えるなど、いろいろなことがありますが、その一番のキーワードは、自然界のリズムを壊さないようにすること、生命を大切にすること、人間以外の生き物がいるのだということです。この地球上は生命の糸で編み上げられたネットで覆われています。人間もその網目の一つに過ぎないことを肝に銘じることです。

先程のビデオのなかで、ダイアン・ダマノスキーが言っていましたが、地球は人間だけのものだという傲慢な気持ちを捨て、謙虚な気持ちで自然に向き合うことを、一番根っこに持つことが大切だと思います。

それから、自分のクリエーションの“創造力”、イマジネーションの“想像力”を働かせて、自分がいかにこの環境の世紀を生きるかという生き方を見つけていかなければならない、と思っています。自然の中に入って子どもたちと遊んでいると、子どもたちの創造力と想像力の無限のひろがりに感動します。子どもだけにそんな楽しいことをやらせておくことはないので、私たち大人も必ずしも森の中に行かなくとも想像力と創造力をどんどん開発していきたいものです。自然のリズムを感じながらの生き方はゆっくりとしています。能率一辺倒、すぐに結果が分からないと評価されない昨今の風潮とは違うかもしれません。しかし、私たちはいまこそ立ち止まって、持続可能な世界を作るためのライフスタイルを見いださなければならないと思います。

「別の道」を歩く

レイチェル・カーソンは『沈黙の春』の最終章“別の道”という章でこう言っています。

「私たちは今や分かれ道にいる。だが、ロバート・フロストの有名な詩とは

違って、どちらの道を選ぶべきか今さら迷うまでもない。長い間旅をしてきた道はすばらしい高速道路ですごいスピードに酔うこともできるが、私たちは騙されているのだ。その行き付く先は災いであり破滅だ。もう一つの道はあまり人も行かないが、この分かれ道を行くときにこそ、私たちの住んでいるこの地球の安全を守れる最後の唯一のチャンスがあるといえよう。とにかくどちらの道を取るか決めなければならないのは私たちなのだ。」

私たちは“別の道”を歩く勇気を持たなければならないと思います。また、どんな別の道があるのかを考えていく、それがこれからの生き方だと私は思うのです。

今、「グローバリズム」というのでしょうか、この道が一番成功する、この道がいいのだなると、みんなそちらへ行ってしまって、その結果がどうでしょうか。すべての玉子を一つの籠に入れたようなもので籠が落ちたら、あっという間に最近の混乱した経済状態になってしまいました。もしも、いくつもの籠に分けてあったら、こんな玉子もあり、あんな玉子もあったら、こんなに一度に割れてしまって、世界同時にあっという間に貧乏になってしまったと大騒ぎするような事態は避けられたのではないでしょうか。もっと別のいろいろな生き方があってよかったのではないかと思うのです。勝ち組はどんどん金持ちになったかもしれないけれども、そのかげで落ちこぼれた人たちもたくさんいる。その人たちは本当に希望も夢もない生活に喘いでいる。そういうことはおかしいです。みんな、それぞれが幸せでなければならないと思います。

源信という天台宗の僧侶が985年に書いた往生要集のなかの言葉です。千年前のことばに今に生きる力を感じます。

「足るを知らば貧と言えども富と名づくべし。財ありとも欲多ければこれを貧と名づく」。財があっても欲が多かったらその心は貧しいです。やはり私たちは足るを知らなければならなりません。それがこの乱世を生き抜く力にもなるだろうと思います。

遺伝子に刷り込まれた緑の記憶

6000万年前か7000万年前に小さな哺乳類の先祖と言われているものが森に生まれてから人類の祖先たちは、ずっと森に住んでいました。500万年前にやっと草原に出てきて二足歩行をするようになり手が使えるようになって頭がよくなり、今日のホモサピエンスに進化してきました。私たちの遺伝子の中には森に住んでいた「緑の記憶」というのがあるのです。緑を見ると目が休まり、森に行くといい気持ちになる、それは私たちの遺伝子の中にある緑の記憶が呼び覚まされているのですね。

ですから、レイチェルが大事なものは遺伝子であると言っているように、そうした生き物としての感覚、私たちの中にある緑の記憶、森に住んでいた生き物であったときの記憶を蘇らせて、五感を鋭くして、アンテナを張り巡らし、

そして多様な生き方をしていきたいと思います。

また、先程言ったように、センス・オブ・ワンダーというのは、いろいろなものに向ける感性でありたいと思っております。そうした感性を持つことで生き残れるし、幸せに生きられると思うのです。生き残ってはいても、いつも不満をかかえ私は不幸だ、貧乏だと言って陰陰滅滅として生きるのではなくて、たとえ貧乏であっても、生きているのはすばらしい、こんなに面白いという、生き生きした明るさを持って生きられるようなところまで、私たちの遺伝子を蘇らせて、今の風潮に慣れないでいきたいと思っています。

明るい希望を持って

そして最後に、今ノーベル賞を日本人が4人も受賞しいろいろな方が話題になっていますけれども、そのすばらしい頭脳を持っている人たちの一番の元は、やっぱりセンス・オブ・ワンダーだと思います。

朝永振一郎さんというノーベル物理学賞をもらった方の言葉にこんなのがあります。

「不思議だなと思うこと、これが科学の芽です。よく観察して確かめる。そして考える。これが科学の茎です。そして、最後に謎が解ける。これが科学の花です」。

こんな素敵な言葉を語っておられます。豊かな感性があって、不思議だな、なんでだろう。だから勉強する、科学する、学問をすることは、まさにセンス・オブ・ワンダーですね。また、やはりノーベル賞をもらった田中さんも、小学校のときの理科実験で何か分からないけれどもむくむく膨れ上がるものを見て「不思議だ、面白い。僕はこれを勉強したい」と思ったがきっかけだと言うことです。不思議だなと思うこと、センス・オブ・ワンダーの気持ちを、私たちはいろいろなところで持ち続ければ、この世の中はもうちょっと楽しくなるんじゃないでしょうか。

このごろみんな険しい顔をしていますよね。今日も新幹線の中で、つんつんして「笑ったら損だ」みたいなおじさんがいました。もっとニコニコしていてもいいじゃないかって思います

私は人生のインデイアン　サマー（小春日和）といいましょうか、冬間近の日々を過ごしておりますけれども、これからも、センス・オブ・ワンダーをもってで生きていきたいと思っています。皆さんもぜひ、そうしてください。この環境の世紀、非常に難しいです。複雑な社会の中で、いろいろな価値観があるけれども、私はやはりセンス・オブ・ワンダーと生命と平和に軸足を据え、創造力と想像力を駆使しながら暮していきたいと思っています。

環境の世紀をみんな元気に楽しく、そして確実に、平和といい環境を子どもたちに残すように努力していきたいと思います。希望を持ってそういたしましょう。どうもありがとうございました。